多民族国家の融合文化プラカナン

山本博之

最近、マレーシアやシンガポールでプラナカンという「民族名」が注目を集めている。ただし、正確に言うとプラナカンは特定の民族の名前ではない。マレー語で「子」を意味するアナックから派生した言葉で、「子孫」や「現地生まれの人」を意味し、しばしば「外来者の子」すなわち「混血者」という意味でも使われてきた。

プラナカンと聞いて多くの人が思い浮かべるのは中国系のプラナカンだろう。15世紀以降に中国からペナンやマラッカに移住した人びとは、現地のマレー文化を受け入れて独自の融合文化を形作った。男性はババ、女性はニョニャと呼ばれたため、プラナカン華人はババ・ニョニャとも呼ばれる。今日では、主に観光と結びつく形で、服装、手工芸品、料理にニョニャ文化が維持されている。

プラナカンは中国系に限らない。19世紀半ばのペナンで、インド系ムスリムがマレー人に対して「私たちはみなプラナカン（現地生まれ）なので同じだ」と呼びかけた。これに対し、マレー人側は「お前たちはプラナカン（混血者）なので我々と違う」と応答した。このように、「現地生まれ」と「混血者」のどちらを強調するかにより、プラナカン概念は包摂と排除の両方の特徴を持つことになった。

近年のシンガポールにおけるプラナカンへの再注目も、これに通じるものがある。

2008年、シンガポールにプラナカン博物館がオープンした。展示の多くはババ・ニョニャに関するものだが、インド系やアラブ系のプラナカンも紹介されている。見どころは第１展示室の四方の壁にぐるりと貼られた顔写真だ。シンガポールの老若男女の顔写真が並び、それぞれ自分がどんなプラナカンか書かれている。福建系、ペナン系、インド系などのさまざまなプラナカンが名乗られているが、そこに共通しているのは、自分がいろいろな文化を受け継いでこの土地に暮らしているという自覚だ。

展示室の壁に並ぶ顔を１つ１つ見ていると、自分も何かのプラナカンであると名乗りたい気分になってくる。両親から九州と関東の文化を受け継ぎ、数年間暮らしたマレーシアの文化も身につけ、ほかにもいくつかの文化が混ざっている私は、何のプラナカンと名乗るかはともかく、いろいろな文化が融合しているという意味ではプラナカンと言えるはずだ。

そう思ったのは私だけではないようだ。プラナカン博物館の開館式典で、リー・シェンロン首相は「私もプラナカンだ」と話したという。この博物館は、英語と華語の二言語で国際社会に打ち勝つ国民を導き、「混ぜ物」のプラナカンには否定的であるはずの首相にまで「私もプラナカンだ」と言わせてしまう力を持っている。

マレーシアやシンガポールは民族別の社会で、融合文化のプラナカンとは対極にあると思うかもしれない。しかし、マレー人も華人もインド人も、それぞれの文明の「本場」である中東や中国やインドから見れば「現地化」しており、今さら「本場」の社会の一員として暮らすのは現実的でない。その意味で、彼らは民族とプラナカンの両方の性格を備えており、常に両者のバランスをとろうとしている。

さまざまな文化がモザイク状に存在しながらも、決してばらばらではなく、「この土地に生きる者」という共通項を持ったマレーシア社会。そのさまざまな横顔を紹介しながら、それらが織りなすマレーシア社会を描いてみたい。[2010.7.27]

（やまもと・ひろゆき　京都大学）